

今日も明日も明後日も

「くろねこのなみだ」番外編

Hotaru Natsuno

夏乃穂足

Illustration/Kaede Rikuro

六芦かえで

この作品は（株）心交社に帰属します。
無断複写・複製・転載を禁じます。

休診日の昼下がりに。俺が新聞を広げていると、友人たちとスケボーに興じていたはずの玖朗が、勢いよくリビングに飛び込んできた。

「大変だ、克己！」

ずっと走って来たらしく、息が弾んでいて、頬が赤い。

「息せき切ってどうした？」

「今日は『えほうまき』を食べなくちゃいけない日なんだって、健介が！」

「ん？ ……ああ、恵方巻きか。そう言えば、今日は節分だったな」

いつ頃からか定かではないが、毎年節分の日になると、スーパーの総菜売り場に太巻きが並ぶようになった。その年の恵方を向いて食べると縁起が良いのだと、新聞か何かで知った。

元々、季節の行事に関心がある方ではない。日本中で一斉に同じ方位を向いて太巻きを食べているのかと思えば何だか滑稽こっけいでもあり、何より節分そのものがファミリー向けの行事だという気がして、毎年素通りしてきたのだが。

今年は世間にならってみるかな。

自分には関心が薄いことでも、玖朗にとってはそうではないんだろう。玖朗の家族は今や俺だけなのだし、この子がやってみたいことならば、何でもつきあってやりたい。

「じゃあ、一緒に買い物に行くか」

「うん！」

玖朗はたちまち弾けるような笑顔を浮かべて、元気よく頷いた。

近所のスーパーで巻き寿司の材料を買い揃え、豆まき用の福豆を買い求めると、玖朗が不思議そうに小首をかしげた。

「豆まきって何だ？」

「玖朗は初めてか？ 一年間の無病息災を願って、節分の日に邪気を払うために豆をまくんだ」

と話しながらも、内心はこの説明でよかったんだったかなと考える。何しろ、豆まきなんて子供の頃以来のことなのだ。

「ムビョウ……？」

「今年も病気にかからず元気でいられますようにってことだ」

「そうか！ 元気が一番大事だからな。本当に、この豆、全部投げているのか？」

ああ、と頷くやいなや、玖朗の瞳がらんと輝きだした。

豆まきの要領を教えてやると、玖朗は案の定、大張り切りで豆をまき始めた。

「ふくはーうちー！ おにはーそとー！」

豆が飛んでくると、ミズキは何事かという風に右往左往し始めたが、ラッキーは楽しそうに床を転がる豆を追いかけている。それぞれの性格が表れていて微笑ましい。

小さかった二匹とも、今は既に成猫で、最近はラッキーの方が一回り体が大きくなった。だが、兄と弟のような二匹の関係は変わらず、臆病で慎重なミズキに、陽気で大胆なラッキーがじゃれついて、追いかけ回している印象だ。

玖朗は良く通る声で掛け声をかけながら、盛大に豆をまき散らかしていたが、ふと何かを思いついたように振り返る。

「『おに』だけ外は、可哀想だな？」

「可哀想？ 鬼がか？」

「うん。おれたちはみんなこうやって中で楽しくしてて、『ふく』という奴のことも入れてやるのに、『おに』だけ仲間外れは可哀想だ。おにも入れてやることにしよう」

生真面目な表情でそう言ってから、再び豆をまき始める。

「ふくはーうちー！ おにもーうちー！」

何だか変則的な掛け声に変わっている。まあ、玖朗がその方がいいならいいか。

豆まきの豆がなくなると、次は恵方巻き作りだ。

玖朗が豆をまいている間に、巻きすや酢飯、具材の用意はしておいた。

普通の太巻きに入れるような、かんぴょうやしいたけ、卵焼きにでんぶと
いった具材だけじゃなく、玖朗の好きなマグロやエビやイクラ、きゅうりや
アボカドなんかも並べてある。

様々なものの並んだテーブルを見て思う。

結構、俺の方が浮かれているのかもな。

スーパ―には出来あいの恵方巻きも並んでいたのに、「自分たちで作るか」と
言い出したのは俺の方だ。平静な顔を装いながら、玖朗の楽しそうな様子
を見るのが嬉しくて、そんな自分の浮かれぶりを、にぎやかに過ぎるような
食卓が暴露しているようだ。

いい歳をして、と思わなくもないが、玖朗の一举一動が愛らしくてなら
ず、玖朗と過ごすどの瞬間も、たとえようもなく眩まぼゆく感じられるのだから、
少しばかり浮ついた気分になってしまったとしても仕方がないだろう。

玖朗と恋人として一緒に暮らすようになって一年余り。俺にとっての蜜月
はまだまだ終わりそうもない。

「好きなものを巻いていいぞ」

「何でも好きなのを入れていいのか？」

玖朗が冷蔵庫まで飛んで行って出してきたのは、うちの冷蔵庫に常備されている、三連ひとパックのプリンだ。

「……それはどうだろうな」

プリンは食後に食べるよう説得し、太巻きの作り方を教えてやる。玖朗はしばらく奮闘していたが、途中で情けない声を出した。

「克己のみたいに、ちゃんと棒にならない」

欲張り仕様の太巻きは、海苔のりが巻ききらないでところどころ弾けている。

「もう少し海苔にのせる酢飯の量を減らせば大丈夫だ。端にはのせないで、こんな風に」

手先が器用とは言い難い玖朗だが、慣れるとすっかり面白くなったらしく、巻きすを巻く手が止まらなくなった。冷蔵庫から出してきたものを何でも巻いてしまう。ハムにレタス、昼間に食べた焼肉の残りなどはまあいいとして、チョコレートやらアイスクリームやらは思いとどまってくれてほっとした。

やがて、二人きりで食べきるには三日はかかるであろう、巻き寿司の山ができた。

「今年の恵方はこっちだ」

ネットで調べた方位を向いて、二人でやや不格好な巻き寿司にかじりつく。

やはりすごく間抜けなことをしている気分になるが、頬をピンクにしてここにこしている玖朗と視線が合うと、気恥ずかしいような気分が消えて、胸の内が甘くとろりとしたものに満たされていく。やがて甘くてたまらないそれがあふれ出し、我知らず俺の唇からこぼれて落ちた。

「幸せだな」

月並みで、何と青臭いセリフだろう。

だが、玖朗はいつだって、言葉にしてしまえば陳腐ちんぷになる想いを、正しい意味と量で受け取ってくれるのだ。

「そうか。この気持ちに幸せなんだな。胸の中にあつたかいものがたっぷり詰まったこの感じは何だろうって、さっきからずっと思ってた。お腹もいっ

ぱいになったけど、胸のところか、もっといっぱいになってる。克己、おれは幸せで幸せで仕方がないぞ」

繕つくろわない素朴な言葉で、全身からきらきらした喜びを発散しながら、出し惜しみを一切せず、愛を返してくれた。

「克己。えほうまき、まだいっぱいあるからな。明日も幸せだな？」

「ああ。明日も明後日も幸せだ」

明日も明後日も、その後も。きつと玖朗がそばにいてくれる限り、ずっと。

〈END〉